

FI2N-5

272
43

高等科修身一

文部省

男子用



0045057001

0045057-001

272. 1-43

高等科修身

文部省・編

文部省

第1 男子用, 第1 女子用

昭和19

AHF

高等科修身 一

男子用

發行所寄贈本

文部省



詔

勅

天壤無窮の神勅

豊葦原の千五百秋の瑞穂の國は是れ吾が子孫の王たるべき地
なり。宜しく爾皇孫就きて治せ。行矣。實祚の隆えまさむこ
と當に天壤と窮りなかるべし。

軍人勅諭

我國の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にそある昔神武天皇躬
つから大伴物部の兵ともを率る中國のまつろはぬものともを
討ち平け給ひ高御座に即かせられて天下しろしめし給ひしよ
り二千五百有餘年を経ぬ此間世の様の移り換るに隨ひて兵制
の沿革も亦屢なりき古は天皇躬つから軍隊を率る給ふ御制に
て時ありては皇后皇太子の代らせ給ふこともありつれと大凡
兵權を臣下に委ね給ふことはなかりき中世に至りて文武の制
度皆唐國風に倣はせ給ひ六衛府を置き左右馬寮を建て防人な

と設けられしかは兵制は整ひたれとも打續ける昇平に狃れて
朝廷の政務も漸文弱に流れければ兵農おのつから二に分れ古
の徵兵はいつとなく壯兵の姿に變り遂に武士となり兵馬の權
は一向に其武士どもの棟梁たる者に歸し世の亂と共に政治の
大權も亦其手に落ち凡七百年の閒武家の政治とはなりぬ世の
様の移り換りて斯なれるは人力もて挽回すへきにあらすとは
いひなから且は我國體に戻り且は我祖宗の御制に背き奉り淺
閒しき次第なりき降りて弘化嘉永の頃より徳川の幕府其政衰
へ剩外國の事とも起りて其侮をも受けぬへき勢に迫りければ
朕か皇祖仁孝天皇皇考孝明天皇いたく宸襟を惱し給ひしこそ

忝くも又惶けれ然るに朕幼くして天津日嗣を受けし初征夷大將軍其政權を返上し大名小名其版籍を奉還し年を経ずして海内一統の世となり古の制度に復しぬ是文武の忠臣良弼ありて朕を輔翼せる功績なり歴世祖宗の專蒼生を憐み給ひし御遺澤なりといへとも併我臣民の其心に順逆の理を辨へ大義の重きを知れるか故にこそあれされは此時に於て兵制を更め我國の光を耀さんと思ひ此十五年か程に陸海軍の制をは今の様に建定めぬ夫兵馬の大權は朕が統ふる所なれば其司々をこそ臣下には任すなれ其大綱は朕親之を攬り肯て臣下に委ぬへきものにあらす子々孫々に至るまで篤く斯旨を傳へ天子は文武の大

權を掌握するの義を存して再中世以降の如き失體なからんことを望むなり朕は汝等軍人の大元帥なるそされは朕は汝等を股肱と頼み汝等は朕を頭首と仰きてそ其親は特に深かるへき朕が國家を保護して上天の恵に應じ祖宗の恩に報いまゐらする事を得るも得ざるも汝等軍人か其職を盡すと盡さゝるとに由るそかし我國の稜威振はさることあらは汝等能く朕と其憂を共にせよ我武維揚りて其榮を耀さは朕汝等と其譽を偕にすへし汝等皆其職を守り朕と一心になりて力を國家の保護に盡さは我國の蒼生は永く太平の福を受け我國の威烈は大に世界の光華ともなりぬへし朕斯も深く汝等軍人に望むなれば猶訓

諭すへき事こそあれいてや之を左に述へむ

一軍人は忠節を盡すを本分とすへし凡生を我國に稟くるもの
誰かは國に報ゆるの心なかるへき況して軍人たらん者は此
心の固からては物の用に立ち得へしとも思はれず軍人にし
て報國の心堅固ならざるは如何程技藝に熟し學術に長ずる
も猶偶人にひとしかるへし其隊伍も整ひ節制も正くとも忠
節を存せざる軍隊は事に臨みて烏合の衆に同かるへし抑國
家を保護し國權を維持するは兵力に在れば兵力の消長は是
國運の盛衰なることを辨へ世論に惑はす政治に拘らす只
一途に己か本分の忠節を守り義は山嶽よりも重く死は鴻毛

よりも輕しと覺悟せよ其操を破りて不覺を取り汚名を受く
るなかれ

一軍人は禮儀を正くすへし凡軍人には上元帥より下一卒に至
るまで其間に官職の階級ありて統屬するのみならず同列同
級とても停年に新舊あれは新任の者は舊任のものに服従す
へきものそ下級のものは上官の命を承ること實は直に朕か
命を承る義なりと心得よ己か隸屬する所にあらずとも上級
の者は勿論停年の己より舊きものに對しては總へて敬禮を
盡すへし又上級の者は下級のものに向ひ聊も輕侮驕傲の振
舞あるへからず公務の爲に威嚴を主とする時は格別なれと

も其外は務めて懇に取扱ひ慈愛を專一と心掛け上下一致して王事に勤勞せよ若軍人たるものにして禮儀を紊り上を敬はす下を惠ますして一致の和諧を失ひたらんには啻に軍隊の蠶毒たるのみかは國家の爲にもゆるし難き罪人なるへし一軍人は武勇を尙ふへし夫武勇は我國にては古よりいとも貴へる所なれば我國の臣民たらんもの武勇なくては叶ふましかんして軍人は戰に臨み敵に當るの職なれば片時も武勇を忘れてよかるへきかさはあれ武勇には大勇あり小勇ありて同からす血氣にはやり粗暴の振舞なとせんは武勇とは謂ひ難し軍人たらむものは常に能く義理を辨へ能く膽力を練り思

慮を殫して事を謀るへし小敵たりとも侮らす大敵たりとも懼れす己か武職を盡さむこそ誠の大勇にはあれされは武勇を尙ふものは常々人に接るには溫和を第一とし諸人の愛敬を得むと心掛けよ由なき勇を好みて猛威を振ひたらは果は世人も忌嫌ひて豺狼などの如く思ひなむ心すへきことにこそ

一軍人は信義を重んずへし凡信義を守ること常の道にはあれとわきて軍人は信義なくては一日も隊伍の中に交りてあらんこと難かるへし信とは己か言を踐行ひ義とは己か分を盡すをいふなりされは信義を盡さむと思は、始より其事の成

し得へきか得へからざるかを審に思考すへし臆氣なる事を
假初に諾ひてよしなき關係を結び後に至りて信義を立てん
とすれば進退谷りて身の措き所に苦むことあり悔ゆとも其
詮なし始に能ふ事の順逆を辨へ理非を考へ其言は所詮踐む
へからすと知り其義はととも守るへからすと悟りなは速に
止るこそよけれ古より或は小節の信義を立てんとて大綱の
順逆を誤り或は公道の理非に踏迷ひて私情の信義を守りあ
たら英雄豪傑ともか禍に遭ひ身を滅し屍の上の汚名を後世
まで遣せること其例尠からぬものを深く警めてやはあるへ
き

一軍人は質素を旨とすへし凡質素を旨とせされは文弱に流れ
輕薄に趨り驕奢華靡の風を好み遂には貪汚に陥りて志も無
下に賤くなり節操も武勇も其甲斐なく世人に爪はしきせら
るゝ迄に至りぬへし其身生涯の不幸なりといふも中々愚な
り此風一たび軍人の間に起りては彼の傳染病の如く蔓延し
士風も兵氣も頓に衰へぬへきこと明なり朕深く之を懼れて
曩に免黜條例を施行し略此事を誠め置きつれと猶も其惡習
の出んことを憂ひて心安からねは故に又之を訓ふるそかし
汝等軍人ゆめ此訓誡を等閒にな思ひそ
右の五ヶ條は軍人たらんもの暫も忽にすへからすさて之を行

はんには一の誠心こそ大切なれ抑此五ヶ條は我軍人の精神に
して一の誠心は又五ヶ條の精神なり心誠ならされは如何なる
嘉言も善行も皆うはへの裝飾にて何の用にかは立つへき心た
に誠あれは何事も成るものそかし況してや此五ヶ條は天地の
公道人倫の常經なり行ひ易く守り易し汝等軍人能く朕か訓に
違ひて此道を守り行ひ國に報ゆるの務を盡さは日本國の蒼生
擧りて之を悦ひなん朕一人の憚のみならんや

明治十五年一月四日

御名

教育ニ關スル勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト
深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥
ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ
此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ
恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ
啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重
シ國法ニ違ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇
運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラ

ス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守
スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕
爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名 御璽

青少年學徒ニ賜ハリタル勅語

(昭和十四年五月二十二日)

國本ニ培ヒ國力ヲ養ヒ以テ國家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セム
トスル任タル極メテ重ク道タル甚ダ遠シ而シテ其ノ任實ニ繁
リテ汝等青少年學徒ノ雙肩ニ在リ汝等其レ氣節ヲ尙ビ廉恥ヲ
重ンジ古今ノ史實ニ稽ヘ中外ノ事勢ニ鑒ミ其ノ思索ヲ精ニシ
其ノ識見ヲ長ジ執ル所中ヲ失ハズ嚮フ所正ヲ謬ラズ各其ノ本
分ヲ恪守シ文ヲ修メ武ヲ練リ質實剛健ノ氣風ヲ振勵シ以テ負
荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ

米國及英國ニ對スル宣戰ノ詔書

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有眾ニ示ス

朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戰ニ從事シ朕カ百僚有司ハ勵精職務ヲ奉行シ朕カ眾庶ハ各其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ舉ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

抑東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ丕顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ拳々措カサル

所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナリ今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト雲端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ中華民國政府曩ニ帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪亂シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經タリ幸ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提攜スルニ至レルモ重慶ニ殘存スル政權ハ米英ノ庇蔭ヲ恃ミテ兄弟尙未タ牆ニ相闕クテ悛メス米英兩國ハ殘存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス剩ヘ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ

於テ武備ヲ增強シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和的通商ニ有ラ
ユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル
脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメムト
シ隱忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ交讓ノ精神ナク徒ニ時局
ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ益々經濟上軍事上ノ脅威ヲ
増大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス斯ノ如クニシテ推移セムカ
東亞安定ニ關スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存
立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衛ノ
爲斷然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ
皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有眾ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗

ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ
以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名 御璽

昭和十六年十二月八日

國務各大臣副署

目 録

一	稚心 <small>ちしん</small> を去る	一
二	御府 <small>ぎよふ</small>	八
三	みくにまなび	十四
四	朋友の交	二十四
五	勤勞の心	三十二
六	新しい經濟	四十二
七	反省 <small>はんせい</small> と努力	四十七
八	食糧の増産	五十四
九	孝行	六十

十	至誠……………	六十八
十一	祝日・大祭日……………	七十六
十二	科學と國民生活……………	八十二
十三	勇氣……………	八十八
十四	古武士の覺悟……………	九十八
十五	皇國の使命……………	百三

一 稚心を去る

勤皇の志士橋本左内先生は、天保五年三月十一日、越前福井に生まれた。父は越前藩の藩醫で、兄弟三人であつたが、左内先生はその長男であつた。

年少の頃から才能拔群で、學問を好み、志すところも普通とちがつてゐた。十六歳の時、大阪に出て緒方洪庵先生の門にはいつたが、その前年に「啓發録」といふ文章を作つてゐられる。啓發録は、稚心を去る「振氣」「立志」「勉學」「交友を擇ぶ」といふ五節から成り、中でも「稚心を去る」といふところに、極めて興味の深いことが書いてある。

「稚心とは、子供つばいことである。果物や野菜のまだ熟さないのが稚で、何事によらず、稚といふことを離れない間は、物の出来あがるといふことがない。竹馬や紙鳶や毬の遊



びを好み、石を投げ、蟲を捕らへることを樂しみ、甘い物うまい物をむさぼり食ひ、なまけ怠り、父母にかくれて仕事もせず、或は、たゞ父母によりかゝる心を起し、きびしい父や兄をば、かつて、とかく母の袖にかくれるやうなことは、みんな子供の乳くさい心から起つて来る。このやうな事は、幼い間は、し

ひて責め立てるほどの事でもないが、十三四にもなり、學問に志すやうになつて、この心が、毛ほども残つてゐたとすれば、決して何事にも上達することはできない。もちろん、天下の大豪傑と成ることなどは望めない。源平の頃、また元龜、天正の頃は、ずゑぶん十二三歳で母に別れ、父に暇乞して、初陣をし手がら功名を立てた人物があつた。これは、稚心がなかつたからである。もし、稚心があつたら、親のひざもとから少しも離れることはできず、まして、手がら功名が立てられるはずがない。稚心を取り除かなければ、士氣が振るはず、いつまでたつても、腰拔武士でゐなければならぬ。だから私は、稚心を去るといふことを、士の道に入る初

めと考へる。」

今、私どもは高等科に進むにつけ、左内先生のこの一文は、實に心を打つものがある。未來への抱負も、足もどから始るのである。もとより、無邪氣で水のやうに澄みきつた童心は、大切であるが、乳くさい未熟な心、親によりかゝつて甘えるやうな心は、捨てなければならぬ。

君がため何か惜しまん若櫻散つて甲斐ある命なりせばとは、眞珠灣特別攻撃隊員の一人として、壮烈な最期を遂げた古野少佐の歌である。少佐は、その時まだ二十四歳の青年に過ぎなかつたが、山本司令長官は、若い特別攻撃隊員の盡忠報國の赤誠に深く感動して、

「今の若い者はなどと、口は、つたきことは申すまじきことと、しかと教へられ、これまた感泣に堪へざる次第に御座候。」と、知友にあてた手紙の中に書いておられる。

かへりみれば、明治の中頃以來、青少年は、とかく壯老年の人になつたより過ぎ、ためにたくましい氣魄を失ひ始めた。それは、維新に際して青少年として偉大であつた人々が、すでに壯年となり、老年となつて、年若い人々は、それに甘え過ぎたからである。

私どもは、昭和の聖代に生まれて、今こそこの稚心を取り去らなければならぬ。もとより壯老年の人々は、青少年の指導者であり、先達であるから、敬ひの念を深くし、またその意見

には、よく耳を傾けなければならぬ。何事も相談して、長上の深く廣い知識と尊い體驗に學ばなければならぬ。だからといつて、すぐに長上によりかゝる心を起してはならない。なまけたり、安逸をむさぼつたりしてはならない。また、いつまでも人々にめんだうをかけるやうなことがあつてはならない。そんなことでは、決してわが日本の元氣な青少年といふことはできない。小楠公が、櫻井驛で父大楠公と別れられたのは、十一歳といふ幼少の時のことであつた。皇國日本が大東亞建設の大業に向かつて進んでゐる時、私どもは、今こそ奮然として起ちあがらなければならぬのである。

まことにわが日本の歴史は、青少年の手で飾られ染めな

れた所が多い。尊い國史の成跡に感動した青少年たちが、次に輝かしい歴史を展開して來たのである。日本の青少年として、私どもの行なひは、國史に輝く忠良賢哲の業績に、また軍神の偉功に、斷じておどるところがあつてはならない。やぐざ者とあざけられ、腰拔とそしられるやうなことがあつてはならない。祖先の美風を受けつぎ來たつたこの血潮に、櫻の花を咲かせてみせると、堅く心に誓ふべきである。

今こゝで、耳をすまして、心眼を見開かう。國初以來の歩武堂々たる青少年の大打進が見えて來る。勇ましくも、ゆかしい、また美しい進軍の姿である。皇國の道にしたがつて、威風あたりを拂つて歩む足音が、高らかに響いて來る。

どの方面を見渡しても、紅顔の少年がゐる。その後、元氣に満ちた青年が続いてゐる。しかも無言の中に、正しく、たくましく、すなほで強くあらうと努めてゐる。何といふりつばな姿であらう。何といふたのもしさであらう。これだからこそ、日本の歴史は、いつまでも光り輝いて行くのである。私どもも、また今その列の中に加つて、歴史上の人物の一人とならなければならぬ。日々の修練に、日本精神の真髓を體得し、高等科生徒としての真面目を、十分發揮しなければならぬ。

二 御府

櫻田門外、こまやかな松の緑をうつすお濠のほとりに立つて、瑞雲たなびく大内山を仰ぐと、木の間がくれに、神々しい御府の一角を拜することができる。

かしこくも明治天皇は、明治二十八年、日清の役が終ると、この戦役に歿したわが忠勇な將兵の英靈を、どこしへに慰めようとの大御心から、特に吹上御苑の南に、一府を御造營あらせられた。これを振天府と御命名、陣歿將校の寫眞を掲げ、將士の姓名を記録し、あはせて、凱旋將士の獻上したあまたの戦利品を收めたまうて、その功績をしのばせられ、末長く後の世まで傳へようとはからせられた。

この寫眞の蒐集に就いて、直々御下命を拜した人の謹話に、

陣歿者の寫眞を集めよとの仰せを受けましたので、さつそく取り集めにかゝりましたが、何分多人數のことですから、寫眞の無いものもあり、やうやくのことで、將校及び同相等官の分だけを、取りまとめることができました。ところで、中には浴衣姿などのものもあつて、お手許にさしあげることをためらひましたが、しかしそれでも苦しからずとの仰せがありましたので、そのまま、さしあげることになりました。陛下は、その寫眞に就いて、一々氏名履歴戰功から、父母兄弟妻子のことまで、こまかくとおたづねになり、永代の保存に堪へるやう、残らず不變色の寫眞にせよとのありがたいう仰せがありました。しかも、その寫眞を御手づから額面

にお插しあそばされたのであります。なほ、廢銃の木で作られたこの額縁はいふまでもなく、建物の配置意匠から、姓名録の字體、行間のあけ方、装幀まで、皆陛下御みづから御指圖になつたのであります。

と言つてゐる。

同じ思し召しから、北清事變の後には、懷遠府を、また日露戰役の後には、建安府を御造營あらせられた。まことに、よと、もに語りつたへよ國のため命をすてし人のいさをを國のため命をすてしますらをの姿をつねにかゝげてぞみる

身をすて、いさを、たてし人の名は國のほまれと共にの
こさむ

と、詠みたまうた勸慮のほどが、ひしくと身にしみてありが
たく感じられる。

明治天皇の御遺範により、更に大正天皇は、大正三年乃至九
年戦役の後に、淳明府を造営したまひ、今上陛下は、満洲事變の
後に、顯忠府を造営したまうた。特に顯忠府御造営に際して
は、

「寫真も廣く普及したことであるから、戦死者の寫真は、下士
官兵の分まで全部集めよ。」

と仰せ出された。傳へ承るだに、私どもは、今更ながら皇恩の



無邊であることを覺えずにはゐられ
ない。

一身を大君に捧げまつることは、も
とより私ども臣民の本分である。更
に、武人として戦場の華と散ることは、
この上ない榮譽といはなければなら
ない。しかも皇恩のありがたさ、臣子
の靈を神として靖國神社にまつらせ
たまひ、その遺影をさへ、高く御府に掲
げたまうてゐるのである。この事を思ふ時、私どもは、たゞ感
涙にむせぶほか、全く言ふべきすべを知らない。

三 みくにまなび

本居宣長先生の「玉かつまに、次のやうな意味のことが書いてある。

「世間で學問といへば、すぐに漢籍かんせきを勉強することのやうに考へて、皇國の古いものを學ぶのは、特に神學とか、和學とか、國學とか言つてゐる。しかし、これは、例の支那を主にして、皇國のものを次にした考へ方で、まことによろしくないことと言はなければならぬ。これは、昔漢籍を學ぶことだけが行なはれて、みくにまなびを専門にする者がなかつたから、自然さういふ呼び方が起つたのである。しかし、近世



になると、皇國の學問を専門にする人たちも、たくさん出来たから、むしろ漢籍を學ぶことを、漢學とか儒學じゆがくとか呼び、皇國のものをこそ、もつぱら學問と呼ぶべきである。世間の人々のもの言ひ方を見ると、この種の言葉を使ふ時に、内と外とのわきまへを知らないで、外國のものを、まるで内のものや

うに考へたものが多い。

くり返し讀んで、味はひのある言葉である。宣長先生は又、

「まことの道は、天地の間にわたりて、何れの國までも、同じく

たゞ一すぢなり。然るに、この道、ひとり皇國にのみ正しく傳はりて、外國には、みな上古より、すでにその傳來を失へり。と言つて、皇國の道の尊さを説かれてゐる。それにつけても、私どもが學問の道を歩む時、必ずわきまへてゐなければならぬのは、大御心の奉體といふことである。

中でも、明治天皇が、道の大本に就いてお示しになつた教育に關する勅語、昭和の大御代、特に青少年學徒に賜はりたる勅語に就いて、日夜その奉體に心をくだかなければならない。

天皇陛下は、昭和十四年五月二十二日、宮城前廣場で、青少年學徒の代表三萬三千五百餘名に御親閱を賜はり、又、二年後の昭和十六年同月同日には、同じ廣場で、全國青年學校の男女生

徒の代表三萬五千餘名に對して、御親閱を賜はつた。青少年學徒に賜はりたる勅語は、昭和十四年の御親閱のみぎり、御式終つて還御あらせられてから、宮中に文部大臣をお召しになつて、賜はつたものである。

勅語には、先づ初めに、

國本ニ培ヒ國力ヲ養ヒ以テ國家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セムトスル任タル極メテ重ク道タル甚ダ遠シ而シテ其ノ任實ニ繋リテ汝等青少年學徒ノ雙肩ニ在リ

と仰せられてゐる。青少年は國力のもとであり、一國の盛衰は、青少年が、しつかりしてゐるか、あないかで定まる。かたじけなくも、親しく上御一人から、この重い使命が、青少年學徒即

ち私どもの雙肩にかゝつてゐるぞとの厚い御信任をかうむつてゐる。更に勅語の終りには、

負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ

と仰せられてある。この深い御期待を身に受けた私ども青少年學徒は、限りない光榮とその重責を、ますます深く肝に銘じなければならぬ。

勅語を賜はつてから、こゝに數年、支那事變はそのまゝ、大東亞戰爭へと移つて、今や明らかに、決戦の段階へ突き進んで來た。戦局は、まことに深刻である。ガダルカナルの轉進から、山本聯合艦隊司令長官の壯烈な戦死、アッツ島に於ける山崎部隊長以下皇軍將兵の玉碎といふやうな出來事は、一億國民

の胸を打ち、いつまでも忘れることのできないところで、前途容易ならぬものがあることを思はせる。國運の隆昌を雙肩に荷なふ青少年學徒のつとめは、極めて重大である。

青少年は、たゞ國家の明日を荷なふだけのものではない。新しい世界の築かれて行く時、青少年は、國家の今日を支へなければならぬとともに、又、明日の國運にも備へるといふ二重の責任を持つのである。

勅語の中に仰せられてある「國家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セムトスル」の道とは、今大東亞戰爭に勝ち抜き、大東亞建設の大業に邁進するといふのほかにない。皇國は、私ども青少年學徒が、剛健な心身、強大な實踐力、雄渾な氣宇を養ひ、一切を

捧げて君國に報ずる至誠を強く要求してゐる。

青少年學徒の第一に心がくべきことは、至誠盡忠の精神に徹てつすることである。家持やかもち卿の歌に、大伴氏の言立ことたてをのべて、

海行かば水みづづく屍かばね 山行かば草むす屍

大君の邊にこそ死なぬ、かへりみはせじ。

といつてゐる。皇國に生まれて、忠を致し、命を捧げることこそ、臣民の道である。軍人にまれ、學徒にまれ、そのほかどんな地位、どんな職業にあるにしても、臣民として君國に報いる道に、變りあるはずはない。

國民の心得は、日々夜々、教育に關する勅語の中に、明らかに仰せられてあるみをしへの一つくを、服膺するところにあ

る。終日の坐作進退、學問技能の習得に及ぶまで、一切の生活が、ことごとく皇國の道に則とつた修練でなければならぬ。青少年學徒の第二に心がくべきことは、皇國の使命に就いて、深い理會と堅い信念を持つことである。大東亞戰爭は、道義に基づく世界新秩序の建設を目ざしてゐる。昭和十五年九月二十七日下したまうた詔書の中に、

萬邦ヲシテ各、其ノ所ヲ得シメ兆民ヲシテ悉ク其ノ堵ニ安ンゼシムル

と、明らかに仰せられてある。私どもはこの曠古の大業を翼賛し奉るため、遠大な識見とたくましい氣魄を、十分養はなければならぬ。

青少年學徒に賜はりたる勅語に、

汝等其レ氣節ヲ尚ビ廉恥ヲ重ンジ古今ノ史實ニ稽へ中外ノ事勢ニ鑒ミ其ノ思索ヲ精ニシ其ノ識見ヲ長ジ執ル所中ヲ失ハズ嚮フ所正ヲ謬ラズ各其ノ本分ヲ恪守シ文ヲ修メ武ヲ練リ質實剛健ノ氣風ヲ振勵シ

と仰せられてある。この御言葉を固く心にしめ、大國民としての資質を備へることが大切である。それでなければ、大東亞十億の諸民族を率ゐて進むことは、到底望まれないのである。

特に、私ども戦時下の青少年は、修文練武に努め、質實剛健の氣風を振るひ起さなければならぬ。國民精神作興に關す

る詔書に、

國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ

とさとさせたまうてある。剛健不屈の心身を備へないで、どうして現下日本の果すべき大業を成し遂げ、世界の進展に備へることができよう。

皇國の使命と戦局の推移に、深く思ひを致す時、私ども學徒は、更に一段の奮起が必要であることを感じないではゐられない。本居宣長先生が、玉かつまで、みくにまなびといふことに就いてのべられた根本も、全くこの皇國のため奮起することを、おいて、ほかには無いのである。

四 朋友の交

教育に關する勅語に、朋友相信シと仰せられてある。朋友の交が、極めて大切なものであることに就いて、特におさとしになつたものと拜察される。

昔から、君臣父子夫婦兄弟に、朋友を加へて、五倫といふことがいはれてゐる。朋友は、互に勵まし、合ひ、助け合つて、世の中の事に當るべきものである。明治天皇御製に、

もろともにたすけかはしてむつびあふ友ぞ世にたつ力なるべき

と、詠ませられてある。朋友が、友情を以つてむつび合ひ、互に

助け合つて、世に立つのは、ゆかしいことであり、それがそのまま國運を隆昌にする基である。

朋友の間は、親密であることが大切であり、信を以つて交はることが大切である。信とは、心に誠があつて、言行にいつはりのないことをいふ。しかも、言つたことを實行するためには、初めに、その事が正しいかどうかを、十分考へておかなければならない。さうでないで、後で果すことのできなないために、不信のそしりを招くやうになる。

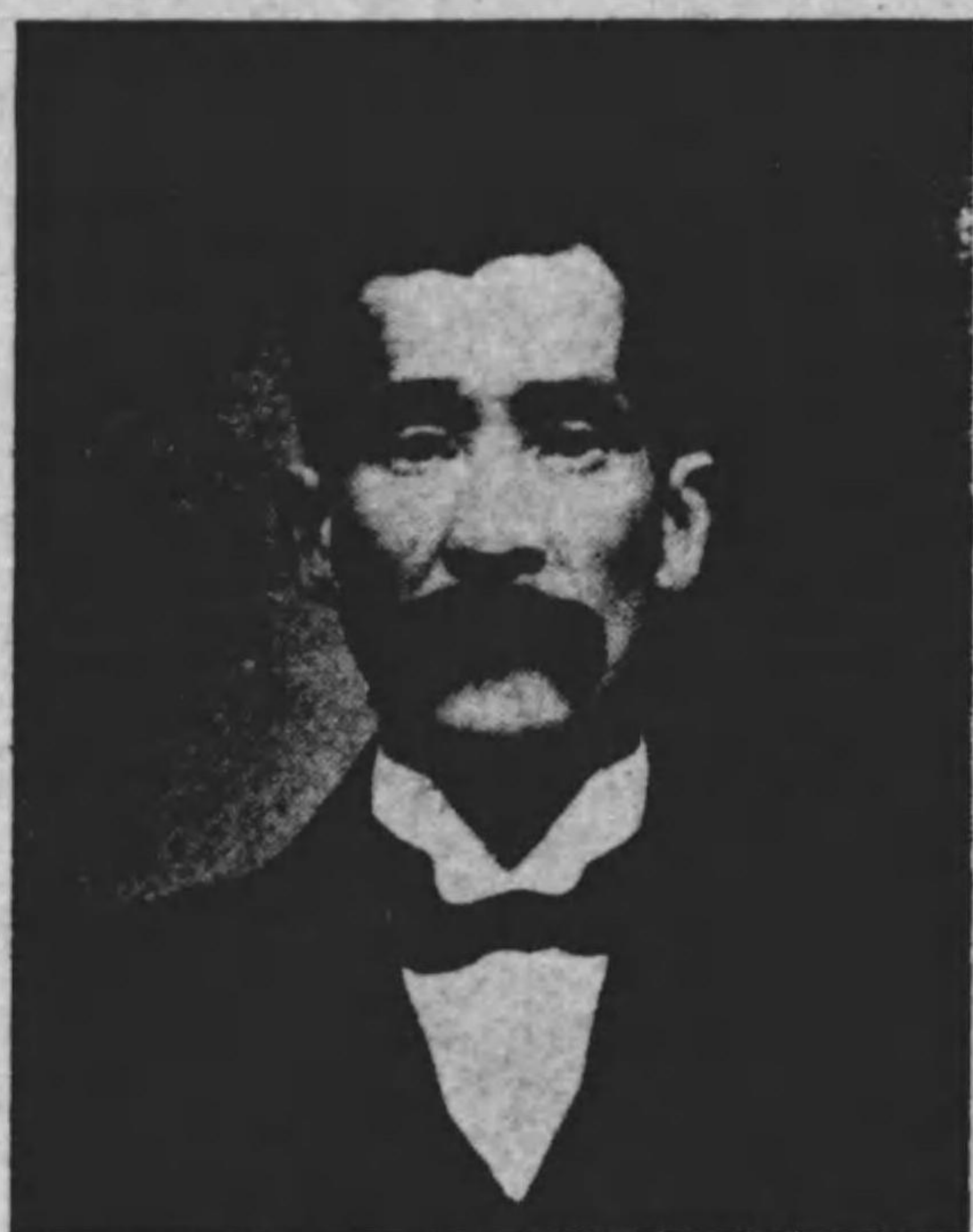
かくて朋友は、信義を以つて長く交はり、利害のために、その交を變へるやうなことがあつてはならぬ。朋友が災厄にかかり、困窮こんきゆうにおちいつた場合には、もちろん進んでこれを救ふ

心がけが無くてはならない。

杉浦重剛先生は、安政二年近江の膳所に生まれ、大正十三年七十歳でなくなられた。若い時から教育のことにたづさはり、終生後進を教へ導いてうまなかつた。大正三年、東宮御學問所が設けられた時、召し出されて御用掛を仰せつけられ、倫理科を擔任して、至誠一貫御進講の大任を果した。

先生は、高潔で重厚、又、友情にあつく、交友も少くなかつた。明治初年、まだ東京の開成學校に學んでゐられた頃、小村壽太郎侯と親しくし、最後まで、その交を變へられなかつた。

後年には、國運を双肩に荷なふほどの重大任務に就いた小村侯も、始めて外交官として世に出た頃は、父の残した負債の



ために、少からず困窮におちいつた。先生は、小村侯のこの苦しみを見るにしのびず、友人と相談し、連帯保證で金を借りて、これを救はうとされた。連帯保證は、やゝもすると、自分までわざはひに巻き込まれるおそれがある。友人の中には、この事に就いて、先生に注意を與へ、方法を誤らないやうにと、さとした者もあつたが、しかし先生は、今、小村侯の目前の急を救ふため、少しもためらつてはゐられないと思はれた。そこで、連帯保證の

止むを得ないことを、その友人に告げて、諒解を求められた。これには友人も、もつともとうなづき、先生の友情に深く感じて、自分自身も、進んで保證に立たうと言ひ出した。

このやうにして、先生を中心とする數名の友人は、小村侯のさしせまつた困窮を救つた。小村侯が、貧乏のどん底に落ちて、なほその志を伸ばすことができたのは、先生の友情に負ふところが、少くなかつたのである。

明治三十八年七月、外務大臣であつた小村侯は、アメリカ合衆國に於ける日露講和會議に、全權委員の重任を帯び、國民歡呼の聲の間に、東京を出發された。小村侯は、かねて戦局の實情を深く察して、會議の條件が國民の期待にそはず、定めて非

難を受けらる結果になるであらうと、覺悟を定めてゐられた。先生は、長く病床にあつて、友の門出を見送ることができず、人に頼んで、送別の言葉を傳へてもらはれたが、なほ小村侯の胸中を察する餘り、

「たとひ、どんな事があらうとも、あくまで自己の所信を貫ぬけ。事の成否は、あへて恐るゝに足らない。」と、奉書に認めて、これを勵まされた。

ポーツマスの談判は、果して國民の期待にそはなかつたので、烈しい非難の聲が、小村侯の身邊を包むやうになつた。先生の家塾にゐる人々さへ、その非を鳴らし始めた。けれども、小村侯を信ずることのあつた先生は、

「小村は、君國のあることを知つて、少しも私心の無い男だ。しかも今、日本第一の外交官である。日本一の外交官が、やつたことだ。あれでよいのだ。」

と言つて、小村侯を辯護し続けられた。しかし、非難の聲は高まるばかりで、小村侯を辯護するのは、杉浦先生のほか、誰一人無いといふ有様になつた。小村侯の同窓の者までが、外務大臣に辭職を勧告しようといきまいて、先生の所へ押しかけて來た。先生は言下にしりぞけて、

「小村なればこそ、あれだけやれたのだ。辭職勧告どころか、總理大臣にもなれる人物だと思つてゐる。」と答へられた。

朋友は、よく選ばなければならぬ。善い友と交はれば、知らず知らずの間に、善い風に化せられ、悪い友と交はれば、いつの間にか、その惡風にそまる。古語に、

「朱に交はれば赤くなる。」

蓬麻よもぎあきの中に生ずれば、扶たすけずしておのづから直し。といふことがある。

朋友の間で、特に心を用ひなければならぬのは、責めて善に向かはせるといふことである。もし、朋友に正しくない行なひがあつたら、忠告して、その心を入れかへさせ、もし又、朋友から忠告を受けた場合には、快くこれを聞いて、自分を正すやうにする。朋友は、心の奥底まで開いて、缺點や過失を注意し

合ひ、又、不善におちいらぬやうに、共々に智徳をみがくべきである。このやうにして、朋友の間に信義が行なはれるならば、おのづから醇厚な氣風も起り、期せずして、億兆一心の實を擧げることでもできるであらう。

五 勤勞の心

わが國では、國生みの神話に見られるやうに、生むとか生産するとかいふことが、昔から極めてだいじなことでとされてゐる。又、皇國は、生々發展の國であると考へられてゐる。この生々發展は、いふまでもなく、生むとか生産とかいふことに、つながりを持つものである。

しかも、こゝに生むといひ、生産といふのは、皇國の道の現れであり、この道義を貫ぬくには、ひた向きに精進して止まない勤勞が大切である。さうして、勤勞にいそむ場合、そこに精神的なものと筋肉的なものとを區別して、その間に、尊い卑しいといふ考へ方をしてはならない。私どもは、勤勞を通して皇國のためにつかへまつる至誠に終始することが、大切である。

皇國の民は、詔のまに／＼つかへまつるといふことによつて、この世に生まれた喜びと尊さを感じずるものである。もちろん、日々の生活に於いては、はつきりと上下の區別を正し、秩序を守ることを、わきまへてゐなければならぬ。しかし、こ

の上下の區別は、私どもが勵精職務を奉行する職分にもとづいたもので、勤勞とは別に考へなければならぬものである。農村では、農作物の收穫が終ると、やがて氏神祭がある。これはいふまでもなく、豐作の喜びを神々に告げまつり、感謝の心を表すものである。鑛山には、山の神々が祭られ、その祭の日には、金山あげて、一日を楽しく暮すならはしになつてゐる。このやうな例は、ほかに幾つも數へることができるのである。勤勞は、まことに、上御一人の御嘉賞ごかしやうになるものであり、農業を始めあらゆる生業は、勤勞につながつて、喜びと感激に満ちるものである。勤勞は、かくも喜ばしく尊いものである。名藩主とうたはれた徳川齊昭公なりあきが、農人形を作つて、食事の時、こ

れに感謝の意を表してから、箸を取つたといふのは、有名な話である。最近では、鑛山や工場で、模範的もはんてきな勤勞者たちが、國家から表彰へいしょうされるやうになつた。

私どもは、勤勞が皇國のための勤勞であり、榮譽であり、喜びであることを、十分にわきまへなければならぬ。更に又、考ふべきは、勤勞が常に道義と不可分であるといふことである。千葉縣香取郡中和村ちゅうわに、長部ながべといふ部落がある。この部落の一角の小高い松林に、史蹟大原幽學先生住宅いづがくといふ標石が立つてゐる。十三箇村の百姓たちに道を説いて、先祖株組合を作らせたのは、實にこの大原幽學先生であつた。

幽學先生は、すてがたきものは義なり。といふ言葉を愛用し、

先祖株組合を作らせるにも、先づ道にかなふことを第一とされた。例へば、組合で共同購入をするにも、安く買ふといふことよりは、それによつて、せいたくな品物を使はないやうにすると、いふことを、重んぜられたのであつた。

先生が、初め長部附近の農村へはいつて行かれた時、村々の道義は全くすたれ、その邊一帯の風俗は、見るに堪へられないものがあつた。しかも先生は、村人たちをよく導かれ



た。日夜、かれらを集めて道を説き、互に協力して勤勞にいそしめといふのが、先生の教への骨子であつた。さうして常に、「自分が死んでも、葬式などはするな。土を盛つて、神の一本も植ゑて置けば、それでよい。五六十一年もたつて、こゝに大原が埋まつてゐるはずだと、木の葉をふみ分けて、人が探すやうになつたら、自分の道もひろまつたのである。百年もたてば、或は世の人にあまねく知られる時が、来るかも知れない。」と語つてゐられた。

或る時、先生は、門人に切腹の仕方に就いて、話されたことがある。

「切腹には、たくさん飯を食はないこと、腹は左手で右に押し、刀を腹に當て、へその下まで切つて、十分息ばると同時に、左手を離すこと、のどは縦に切り、正坐して首を垂れるのが、方式である。」

先生は、心の奥底に、このやうな堅い覺悟を持つてゐられたのである。

晩年、ざん言によつて、七年といふ長い間、江戸に捕らはれ、身となつたが、許されて歸ると、その間に、農民たちの風儀が、再び悪くなつたのを見て、先生は悲しみの餘り、その言葉通り腹を切つて世を去られた。しかし、時はたつて、今中和村を中心に、その教へを堅く守り、勤勞の道に立つて、農業の正しい經營

にいそしむ農民たちが現れ、うるはしい村々を作つてゐる。

私どもは、最後に橋守部先生たかはなもりべの言葉に耳を傾けよう。先生の文に、次のやうな意味のことが書いてある。

「世間の職業は、もとより自分のために營むことではあるが、それをわが身のためだと考へると、自然に私心が出て、必ず人の信賴しんらいを失ひ、氣持を傷つけるやうになる。だから、同じことでも、人のために行なつて、自分は又、世間の人に養はれよう、と、心がけなければならぬ。」

人のためにするとは、例へば、大工は、注文した人のために、よい木材を選んで、びたすらに家をよく作らうと、けんめいになり、又、商人は、買ふ人のために、よい品を選んで、少しでも値

段^{だん}を安くしようと、注意するやうなことをいふ。何事でもこのやうに、人のために身を勞し心を盡くせば、他人もまた自分のために情をかけ、まごころをよせて、自分は自然、世間の人に養つてもらふことになる。

世間の人は、唯大宮仕へをすることだけを、御奉公だといふが、この日月の照らしてゐるところで、大君につかへない人があらうか。唯高下の區別こそあれ、みんな大君におつかへする身であるから、物を書くのも大君のため、疾^{やまひ}をなほすのも大君のため、田を作るのも大君のため、商なひをするのも、もとより大君の御ためである。

誰もが、このやうに心得て、各自の職業に勤勞の心を惜しまなければ、神々も御加護になつて、自然に身を立てることが出来る。しかるに、今の世の人々は、唯世の中に放し飼ひにされたもののやうに考へて、それぐのつとめも職業も、唯自分一人の世渡りのためと思つてゐる。だから、いつのまにか、心がけもいやしくなつて、身勝手なふるまひも、よくない事をさへするやうになる。さういふ人は、神のあはれみからもれて、その身を立てることも、できなくなるのである。

深く味はふべき言葉ではないか。

六 新しい經濟

私ども國民は、常に皇國の隆昌をこひねがひ、その生々發展のために、身を捧げようと努めてゐる。この目的を果すためには、あらゆる妨げを取り除いて、皇國を護ることが大切である。皇國を防衛しない國民は、皇國の民ではないとさへいへる。この意味で、私ども國民が日々營んでゐる經濟の働きも、また當然、皇國を護るためのものでなければならぬ。

ところで、これまでは、往々にして、國を護るといふことと經濟とを、別のものであるやうに考へる傾きがあつた。つまり經濟は、個々の人々、或はそれらの國が、自由に競争して、その

欲望を満足させ、一途に多く利益を擧げるためのものと考へられがちであつた。しかし、私どもはこの事に就いて、根本から考へ直さなければならぬ。現代の戰爭は、いはゆる總力戰であり、武力とともに、經濟も、また戰爭から切り離して考へることはできないからである。

私どもは、戰爭に勝ち抜くために、先づ、すぐれた強い軍備を整へなければならぬ。そのためには、性能の高い軍需品をたくさん作り出す生産力を整へて、國力をしつかりさせることが大切である。したがつて、皇國の經濟をもつと高く、もつと廣く、もつと強いものにする必要があるになつて來る。

「もつと高く」といふのは、國民の持つ生活力をもつと高い程

度に、生産に向けさせることである。「もつと廣くといふのは、経済の範圍はんみを、日本、滿洲、支那から、更に大東亞にひろげて、共榮の實を擧げ得るやう、しつかりしたものにすることである。「もつと強く」といふのは、皇國の経済が、外國にたよらなくてもすむやうに工夫して、どんな事が起つても、微動だにしない底力を持つやうにすることである。

即ち、皇國経済の目ざすところは、大東亞に於ける、自給自足の確立である。さうしてそのためには、大東亞のいろく々な物資を、自由に求め得るやうにすることが、先づ必要であつて、大東亞建設は、一面、このために進められてゐるといつてよいほどである。

次に、さし當り國內で求めることのできる物資を、できるだけ必要な用途にあてるやう、工夫することが大切であり、その見地から、さまざまな代用品も作られるのである。さうして、私どもは、最後に、皇國日本を經濟力に於いて、世界のどの國よりもすぐれた國にすることを目ざしてゐるのである。

帝國政府は、昭和十五年いちばやく、新しい經濟の動く方向を定めて、戦争に勝ち抜くための準備を整へた。もちろん、この戦争は、一通りの心構へでは、決して片づくものではない。この際、國民として最も大切なことは、國の定めたところをよく守ることである。いろく々の命令や規則が、次々に出され、又、企業けいぎの整備が行なはれるにつけて、私どもは、皇國をりつぱ

なものにする戦士であることを堅く信じ、それら命令や規則に従つて進まなければならぬ。

あらゆる統制は、生産力を高め、戦力を増強するために行なはれる。私どもは喜んでこれに協力するとともに、勤勞を通して皇國に報ずる覺悟がなければならぬ。日常生活に於いては、物資を節約するために、總べてのむだを省き、努めて消費を少くすることが大切である。國民として強く責任を果すのは、このやうな手近なところから始る。しかも、それがそのまゝ、大東亞建設に挺身して、新しい世界をつくる基となるのである。

七 反省と努力

廣瀬淡窓先生は、豊後の人である。咸宜園といふ家塾を開いて、三千餘人の弟子を教育された。

幼い時から學問を好み、十二三歳の頃には、もう一通り漢籍を讀み、詩文もよく作れるやうになつた。ところで、十五六歳の頃から、とかく病氣がちになつた。病床で考へてみると、これまで氣づかなかつた自分の性質や行なひの上に、いろいろよくないところがある。この反省がもとになつて、十八歳の時、大いに心身を鍊磨し、是非とも國家のお役に立つ人物にならうと、堅く心に決するところがあつた。

みると、残りの善の数が、一萬を越えてゐる。先生の年來の望みは、かうして達することができたのである。その時、既に六十七歳の高齢であつたが、それでもまだ安んずる心はなかつた。更に同じ方法で、反省の工夫を続け、七十五歳で歿するまで、一日として怠られるところがなかつた。

半生は病氣がちであつた先生も、かうした努力によつて、その長壽を保つことができ、しかもその人がらが、次第に圓熟したものとなつた。

「論語」に「吾、日に三たび吾が身を省みる。人の爲に謀りて、忠ならざるか。朋友と交はり、言ひて信ならざるか。習はざるを傳ふるか。」といつてある。この言葉のやうに、私どもは、少く

とも、夜、床に就く前には、その日の行なひを反省し、努めてよい習慣を養ふやうにしたいものである。日誌をつけるのは、更によいことである。

海軍兵學校の生活でも、反省といふことが、非常に大切とされ、夜の自習を終る前、特に「五省の時間」が設けられてゐる。九時半、合圖のラツパが鳴ると、分隊伍長が、先づ正面に掲げられた軍人勅諭の奉讀を行なひ、それがすむと、しばらくの間、沈思黙考の時間が続く。やがて、その日一日の生活を、五つの事からにわたつて、反省を行なふ。

- 一、至誠に悖るなかりしか。
- 一、言行に恥づるなかりしか。

一、氣力に缺くるなかりしか。

一、努力に憾みなかりしか。

一、不精に亘るなかりしか。

以上を、分隊伍長が凜乎たる聲で朗讀する。それによつて十秒、二十秒、息づまるやうな静けさの中に、少しも假借するところのない自己反省のむちが、振りおろされるのである。陸軍豫科士官學校でも、ほゞ同じ事が行なはれてゐる。

私どもは、これらの事に就いて知る時、すぐにそれを自己錬磨の糧にする心がけがなければならぬ。兵學校で分隊伍長が朗讀をするのは、そこで團體の生活が營まれてゐるからである。けれども反省は、何も分隊伍長の朗讀をのみまつて、

行なはるべきことではない。「君子は、その獨りを慎む」といふ言葉がある。自分一人の場合でも、反省は斷乎として行なはれなければならぬ。

しかも大切なのは、唯反省するといふことだけではない。それをそのままに、明日の努力に備へなければならぬ。努力の伴はない反省は、むしろ無意味である。

もとゞ人には、何か特殊な性癖といふものがある。又、時として、言行に過ちのあることも免れない。そのまま、それを打ち捨てて置くと、惡癖はいよゞ増長し、過ちは習慣となつて、遂に直すことができなくなる。私どもが、君國のため役立つやうになるには、是非とも反省を重ねて、かうした性癖をた

め直し、又、言行を改めて、一步々善に向かつて進むやうに、努力しなければならぬ。

八 食糧の増産

わが國民は、日清日露の兩戰役から、第一次歐洲大戰、滿洲事變のいづれの場合に於いても、食糧の不安を感ずることは、全くなかつた。ところが、今度の大東亞戰爭では、これに就いて、慎重に考へなければならなくなつてゐる。戰爭を勝ち抜くためには、食糧に於いても、敵に勝ち抜くことが大切であり、随つて食糧の増産といふことが、刻下の急務となつたわけである。

支那事變が起つて以來、農村では、青年や壯年の人々の應召、軍需工場その他戦力増強方面への轉出などで、勞力の不足を生じるやうになつた。又、肥料農具などの供給が減つたり、牛馬の徴發買ひ上げなどのため、その經營が、次第に窮屈になつて來た。しかしそれでも、よくこの困難に打ちかつて、食糧の生産を確保し、更に進んで、増産の實を擧げて來たのである。特に昭和十四年以來は、主食物である米麥の増産計畫が、本腰になり、全く官民一體となつて、これに努力してゐる。それがためには、生産農家の並大抵でない骨折りがあることを考へ、私どももまたこれに續く覺悟をしつかりと固めることが、大切である。

食糧戦の武器は、鉄と汗のほかには無い。鉄を振るひ、汗を流して、食糧を増産すること、これが今の食糧問題を片づける第一歩であり、又、最終の道である。銃後農民の奉公は、全くこれに盡きるといふことができ、さうして、私ども國民全部が、それに協力することが大切なのである。

更に、この食糧難を切り抜けるてだてとして、食糧を貯蔵するといふことが、次に大切な問題となる。農作物は、取入れまてに一年かゝる。一年かゝつて、果して思つた通りに出来るかどうかは、人の力だけで、きまらないことである。それ故、主な食糧である農産物に就いては、いつも相當のゆとりを持つやうに、工夫しなければならぬ。つまり十分注意して、不時

の用意に備へなければならぬ。

第一次歐洲大戦で、ドイツは戦闘に勝つて、戦争に負けた。それには、種々の理由もあるが、食糧の缺乏けつぱといふことが、大きな原因をなしたと考へられる。そこで、今度の戦争が始る前、ドイツはいふまでもなく、さきに勝つたイギリスまでが、できるだけ多くの食糧を集めて、それを貯へて置くことに努めた。まことに食糧の確保は、彈丸の確保と同じく、戦争に勝ち抜くため、極めて大切である。私どもは、この點によく思ひを致さなければならぬ。

このやうなわけから、わが國では、最近、米の國家管理を行なふやうになつた。米だけでなく、麥や、さつまいも、じゃがいも

など、主食にする農産物、及び小麦粉、とうもろこしなどの加工品まで、國家の手で管理されることになつた。

米穀が、割當てによつて配給されるやうになつたのは、昭和十六年から、まだ日が浅い。しかし、そのため農家は、汗を流して作つた自分の米を、供出しなければならなくなつた。農家は、これまでの行き方からみると、かなり窮屈な思ひをしなければならぬ。それでも、今の戦局を思へばこそ、不平も起さず、進んで供出してゐるのである。だから私どもは、一粒の米でも粗末にせず、感謝の心を以つて、これを扱はなければならぬ。

よし、食糧の不足が起つたととしても、その苦しみは、國民の全

部が公平に分擔すれば、極めて軽くすみますことができる。私どもは、この事をよく考へなければならぬ。さうして食糧の消費に就いては、政府の指導に、進んで力をあはせる心がけが、何より大切である。

消費を少くするためには、一方で、米のつき方を少くすると、玄米のまま、でたべるとか、いふことも、工夫されてゐる。更に代用食とか、混食を多くすることも、いよく必要になつて来るであらう。その土地その土地で、昔からたべてゐたものを研究して、食事のおきなひとすることは、今の食糧問題を片づける上に役立つことと考へられる。

私どもは、これらの事がらを、眞剣になつて工夫するとともに

に、副食物に就いても、いろく増産をはかり、銃後奉公の赤誠を致さなければならぬ。

九 孝行

私どもはこの世に生まれ出ると、父母の深い慈愛を受けて育つて行く。こゝにおのづから、父母に親しみ、父母を敬ふ心も起り、又、知らず知らずのうちに、すなほな心も生まれて来る。この心は、そのまま、他人に對する好意ともなり、信賴しんらいの念ともなるのである。それ故、人の一生で大切な徳行は、總べて子として父母につかへる心から始るといつてよい。孝は徳の本なり。といふ言葉もある。

明治天皇の御製に、

たらちねの親につかへてまめなるが人のまことの始なりけり。

と詠よませられてある。私どもはこのみをしへに就いて、深くわきまへるところがなければならぬ。

わが國には、昔から孝行に關するうるはしい言ひ傳へが、極めて多い。わが國上下をあげて、人情があついのも、全く孝を重んずる美風があるからであり、それが又、國のさかになる基ともなつた。このやうに、孝は大切な道である。教育に關する勅語には、臣民の守るべき道をお示しになるに當つて、先づ第一に、父母二孝二と仰せられてある。私どもは、常に孝道

を守つて、聖旨にそひ奉り、ますくわが國の美風を發揚することに努めなければならぬ。

孝行の道は、父母を敬ひ、その命に従ひ、その心を安んずるところにある。私どもはこの心得を終始一貫、變へないやうにするのが大切である。私どもがまだ年少である頃は、父母も元氣であるが、成長するにつれて、次第に父母は老いて行く。だから、子たる者は、一日でも孝養をゆるがせにするやうなことがあつてはならない。古人の言に、

「樹、静かならんと欲すれども、風止まず。子、養はんと欲すれども、親待たず。」

とある。私どもが成長してから、なほ父母が健やかなのは、子

としてこの上もないしあはせである。朝な夕な、必ず顔をやはらげ、温かい氣持で、父母につかへるやうに努めることが、私どもにとつて、何よりも大切なことである。

備中浅口郡柴木村に、甚介といふ人があつた。農を以つて家業とし、母につかへて、よく孝行を盡くした。毎朝努めて早く起き、茶をわかつて、母の起きるのを待ち、食事の場合も、母がたべてから、自分も箸を取るといふふうであつた。

又、母が寝る時には、自分で母の床を延べ、冬はその床を温め、夏は涼しくして眠らせた。母が寝ても、熟睡しない間は、決して眠らず、夜がふけるまで、母の側にゐて慰め、痛い所があればなでさすりして、ねんごろにいたはつた。家に敷いてあるの

は、皆むしるであつたが、その中の一枚だけを疊にして、その上に母を坐らせた。

かうして何年も、母のいひつけのまゝに行なつて、少しもさからはなかつた。用事があつて、岡山に行くことがあれば、必ず母の好むものを買ひ求めて歸り、それを母にすゝめて喜ばせるやうにした。

このやうにして、母は八十歳の高齢を重ねたが、六十歳ばかりにしか見えないので、人がそのわけをたづねると、母は、

「甚介が親切にしてくれるので、何も心配がありません。私ほどしあはせ者は、恐らくありますまい。老衰ろうすいしないのも、全くそのためでせう。」

と答へたといふ。甚介翁は延寶えんぼ九年の秋、六十歳で歿したが、その子孫にもよく翁の遺風を受けついで、孝心のあつて人が現れた。祖父母につかへるにも、父母につかへるのと同じやうに、敬愛の誠を致すことが大切である。殊に祖父母は、年を取つて、耳が遠かつたり、手足が不自由であつたりするから、孫としては、一層心を用ひて、つかへるやうにしなければならぬ。敬と愛と信は、日



本人本来の美風である。この點を私どもはよく心に刻んでおかなければならない。

祖先を尊ぶこともまた孝の道である。神武天皇が國內を御平定になつた後、皇祖天神をいつきまつつて、大孝をのべ給うたのは、御みづから萬世にわたつての模範を垂れ給うたものと拜察される。孝道を全うするためには、唯父母祖父母を敬愛して、よくこれにつかへるといふだけでは足りない。進んで祖先を尊び、祭祀の禮を厚くして、その墳墓をも大切にしなければならぬ。又、父祖の志をつぎ、父祖の美風を傳へ、常に身を修め、業務に勵んで、家名を揚げるやう心がくべきである。

父祖に孝を盡くさうとする私どもが、最も心しなければならぬのは、至誠盡忠の精神に立つといふことである。私どもの父祖は、皇室につかへて誠忠を捧げたのであるから、君に忠を盡くすことは、そのままに父祖の志をつぎ、父祖の遺風をあらはすことであつて、それがやがて、父祖に孝であるゆゑんである。教育に關する勅語には、

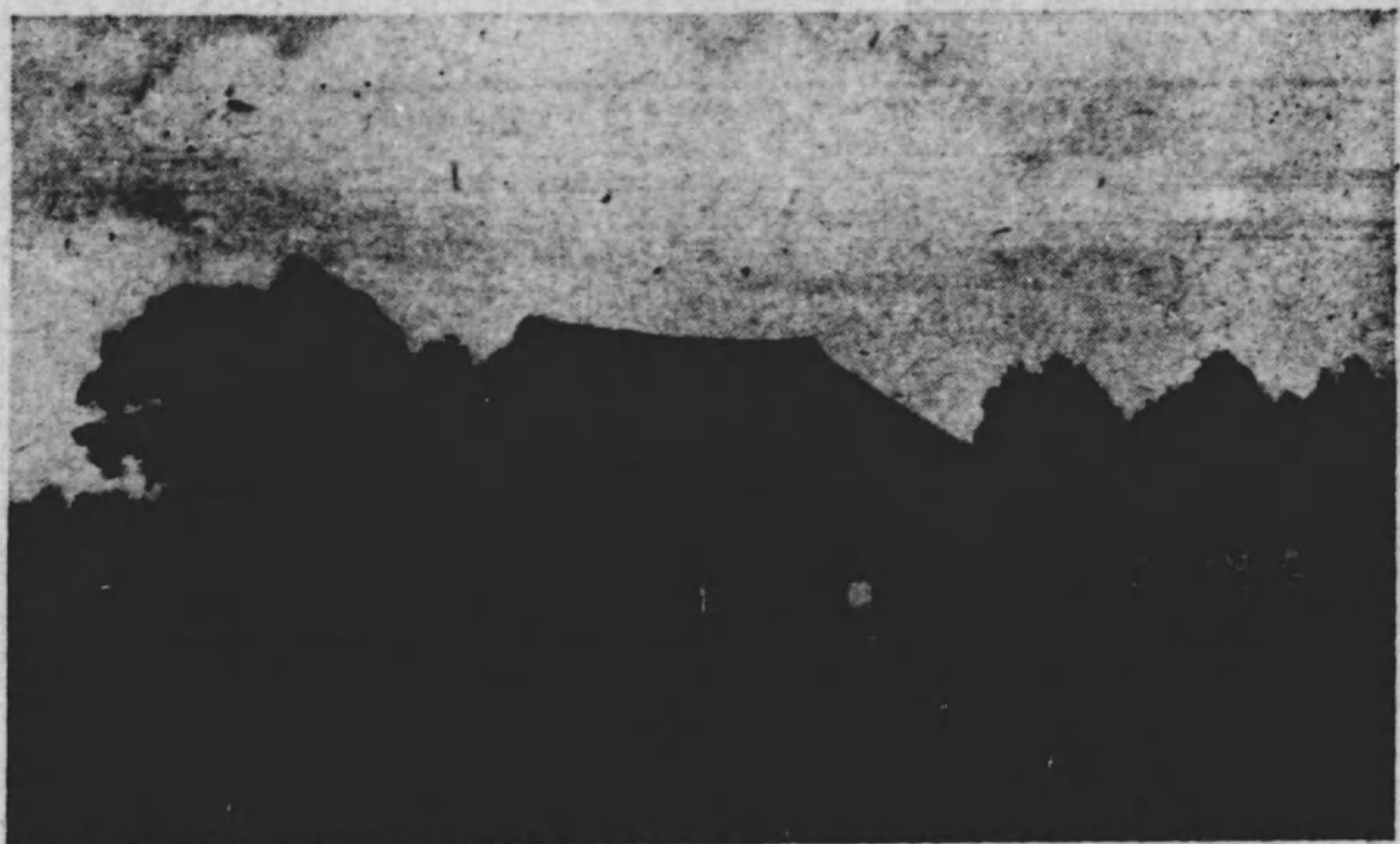
克ク忠ニ克ク孝ニ

と仰せられてゐる。又、忠臣は孝子の門に出づ。といふ古語もある。皇國日本では、忠を離れて孝は全く存しないといふことを、よくわきまへておくことが大切である。

十 至誠

二宮尊徳先生は、三十六歳の時、小田原藩主の命を受けて、下野櫻町の復興に當られた。その頃、この土地の住民は、なまけ者が多くて、農事に勵まず、田や畠は、多く荒れはててゐた。先生は、櫻町に行つて、暑さ寒さをいとはず、日々領内を廻り、住民の生活ぶりを見極め、又、土地のよしあしを十分に調べて、うむことを知られなかつた。

更に先生は、農事を奨励し、荒地を開拓させることをはかられた。すると、心がけのよくない者もあつて、住民たちをおだて、いろく事を構へては、先生の仕事のじやまをしようとした。



た。しかし先生は、すぐこれを罰し、うとしないうで、道を諭し善をすゝめて、七年といふ長い間、努力を続けられた。一方、小田原から出張して一しよに仕事をしてみた二三の役人たちにも、先生の仕方を喜ばず、藩主に上書して、惡しざまに訴へた者もあつた。藩主は、先生を呼び出し、事情をよく聞きたゞしたが、先生の誠意は、すぐに分り、藩主は、かへつて、長い間の苦心を慰めるほどであつた。ところで、わが身を省みることの厚い先生は、

「心がけのよくない者がほかにゐて、復興の仕事を妨げ、又一しよに仕事をする者が、自分を信じないといふのは、全く自分に誠が足りないためである。誠が通じさへすれば、成就しないはずはない。」

と考へて、その後は身を清めて神に祈り、誠意の限りを盡くして事に當られた。以来、土地の人々は、一日々々とまじめになり、仕事に精を出すやうになつて、數年後には、數百町歩の荒地が開かれるに到つた。

かういふ話もある。岸右衛門といふ者があつて、相當の資産も持つてゐたが、生まれつき非常に吝嗇で、その上、惡がしこいところがあつた。かれは、先生をあざけりの、しつて、村民

たちに、いろく、惡智慧をつけた。しかし、先生は、岸右衛門に對して、少しもとがめだてをせず、真心から教へ導かれた。さすがの岸右衛門も、次第にその感化を受けて、數年の後には、全く自分が惡かつたと悟り、家財を賣つて得た百餘兩の金を、全部、窮民を救ふために、提供するほどになつた。

「わが道は、至誠と實行のみ。古語に、至誠神の如しといふといへども、至誠は則ち神といふも、不可なかるべきなり。凡そ世の中は、智あるも學あるも、至誠と實行とにあらざれば、事は成らぬものと知るべし。」

とは、先生の殘された教へである。このやうに先生は、至誠と實行とを大本にして、努め勵んで、物を産み、分に應じてゆづり

合ふことを、一番大切な心がけとされた。

乃木大將も、また至誠の人であつた。大將が、日露戦役に第三軍司令官として出征し、旅順に、奉天に、輝かしい武勳を立てられたことは、人のよく知るところである。難攻不落の旅順を攻めた時は、率先して戦線に立ち、彈雨のもとにあつて、部下を勵まし、起居飲食を共にして、これをいたはられた。そのために、全軍將兵は一層決死の勇を振るひ起したのであつた。やがて大將が東京に凱旋された時、幾萬の群衆は、旗を振り、萬歳を唱へて、心から歓迎した。けれども大將は、無事に歸つて相すまぬ。とでも言ひたげな面持で、一々答禮されたが、その様子は、深く群衆の胸を打つものがあつた。

「王師百萬強虜を征す。野戦攻城屍山を作す。愧づ我何の顔あつてか父老に看えん。凱歌今日幾人か還る。」
 とは、この時の大將のいつはらざる感懷であらう。

大將は、明治天皇に拜謁を仰せつけられ、復命書を捧呈して、部下に多数の死傷者を出したことを、心からおわび申しあげた。天皇は、その戦功を嘉せられ、金一封を下賜あらせられた。そこで大將は、これを以つて記念品を作り、部下に分つて、長く聖恩を感謝し奉ることとされた。

天皇は、深い思し召しから、後に大將を學習院長に任じ給うた。以來、大將は、寄宿舎に起卧して、率先範を垂れ、生徒の育成に努められた。或る時は、老軀をひつさげて、劍道の相手をし、

或る時は、海岸の天幕の下で、寢食を共にして水泳を奨励するなど、生徒の教育に餘念がなかつた。

明治四十五年、天皇の御不例に際し、大將の心配は一通りでなかつた。水垢離を取つて御平癒を祈り、又、日夜參内して、天機をうかゞひ奉つた。大將が、宮中から退下して來られるうれはしげな姿を見ると、宮城前に集つて、宮内省の發表に一喜一憂してゐた群衆は、更に天に仰ぎ地に俯して、祈願に赤誠をこめるのであつた。

私どもは、今深くこのやうな人々の行なひに學ぶところがなければならぬ。君國のため盡くすのも、父母につかへるのも、決して他から強要されてするのではなく、又、私利私欲の

ために行なふものでもない。昔の人が、明き清き直き誠の心と呼びならはしたものこそ、こゝにいふ至誠である。これは又、良心の聲といふこともできる。良心の聲に従つて、日々の行なひを慎むところに、私どもの大切な道義的態度が養はれるのである。軍人勅諭に、

心誠ならされは如何なる嘉言も善行も皆うはへの裝飾にて何の用にかは立つへき心だに誠あれは何事も成るものそかし

と仰せられてゐる。いかなる行なひも、いつはりや飾りのない至誠の心から出て、始めて眞の善となる。至誠こそは、實にあらゆる善行の基である。

十一 祝日大祭日

皇國の祭祀は、尊いわが國體に基づくものであつて、政治も、
教學も、みなこの祭祀と結んで離れない關係にある。古くか
ら、わが國が神國と呼ばれて來たゆゑも、またこゝにある。
畏くも天皇陛下には、祝日大祭日に、嚴かな御祭儀を行なは
せられ、皇祖皇宗の御心を御心として、わが國を治め給ふので
ある。私ども臣民は、この尊い大御心のほどを體し奉つて、祝
日には、喜びの心を表し、大祭日には、つゝしみの誠を捧げて、寶
祚の無窮を祈り奉り、いよく本分を盡くす覺悟を固くしな
ければならない。

祝日としてあげられるものは、新年紀元節・天長節及び明治
節の四つである。

新年といふのは、一月一日・二日・五日の三日で、年の始めの祝
日とされてゐる。宮中では、一日早朝に四方拜並びに歳旦祭
の儀を、同日及び二日には新年朝賀の儀を、又、五日には新年宴
會の儀をとり行なはせられる。

紀元節は二月十一日で、第一代の神武天皇が、御即位の禮を
行なはせられた日に當る。この日、宮中では賢所・皇靈殿・神殿
の御祭典がとり行なはれ、天皇陛下の御親祭がある。次いで
拜賀の儀、參賀の儀、宴會の儀が行なはれる。

天長節は四月二十九日で、この日全國民は、天皇陛下の御降

誕を祝し、聖壽の無窮を祈り奉る。又、明治節は十一月三日で、明治天皇の御遺徳を仰ぎ奉り、明治の昭代を追憶する祝日である。天長節、明治節の兩日、いづれも宮中では賢所、皇靈殿、神殿の御祭典に次いで、拜賀の儀、參賀の儀、宴會の儀をとり行なはせられる定めとなつてゐる。

大祭日には、元始祭、春季皇靈祭、神武天皇祭、秋季皇靈祭、神嘗祭、新嘗祭、大正天皇祭等がある。天皇陛下御みづから皇族、臣僚を率ゐて、御手厚い祭祀をとり行なはせ給ひ、報本反始の範を垂れさせ給ふ。

このうち、元始祭は一月三日で、年の始めにあたり、天皇陛下御みづから、賢所に皇祖天照大神を、皇靈殿に御歴代の皇靈を、

又、神殿に天神地祇をお祭りになる。皇位の本始をことほぎまつり、孝敬をのべさせ給ふ御祭である。春季皇靈祭は春分の日、秋季皇靈祭は秋分の日、これまた陛下御みづから、御歴代の皇靈を皇靈殿にお祭りになる。

更に、神武天皇祭は四月三日で、皇靈殿に第一代の天皇神武天皇をお祭りになる御親祭があり、十二月二十五日の大正天皇祭にも、同じく皇靈殿に、先帝大正天皇を祭り給ふ御親祭がある。

神嘗祭は十月十七日で、その年の新穀を、諸神に先だつて、伊勢の神宮に奉らしめ給ふ御祭である。この日、天皇陛下には、親しく皇祖天照大神の神恩を感謝し給ふのであつて、まこと

に畏き極みと申すべきである。當日、陛下御みづから先づ神宮を御遙拜になり、次いで賢所の御親祭がある。神宮には、勅使を参向せしめて、幣帛を奉らしめ給ふのである。

十一月二十三日の新嘗祭には、神嘉殿に天照大神を始め奉り天神地祇を御招請になつて、當年の新穀を御みづからお供へになり、御直會と申して、陛下御みづからも御同殿に於いて、これをきこしめされる。この御祭には、夕の儀と曉の儀とがあつて、霜の置く寒夜を徹して、御親祭あらせられるのである。曉の儀が終ると、陛下より参列の諸員に御酒御饌を賜はる。この御事は、大嘗祭の御儀に於ける大饗の御事と思ひ合はされて、大御心のほど、まことに畏い極みである。

この日、神宮には勅使を参向せしめて、幣帛を奉らしめられ、更に、官國幣社にも幣帛を奉らしめられる。又、この御祭は、二月十七日の祈年祭に、神宮並びに官國幣社に幣帛を奉らせられ、億兆のため五穀の豊穰を祈らせ給うた、その御報賽ともなるのである。

私ども臣民は、祝日大祭日の大切である根本に就いて、十分わきまへ、その日にめぐりあふごとに、君民體ヲ一ニスと仰せ出されたわが國體の限りなく尊いゆゑんに就いて、深く思ひを致すべきであり、いよく敬神崇祖の念を深め、盡忠報國の赤誠を捧げなければならぬ。

十二 科學と國民生活

科學の研究は、極めて大切なものであり、國民生活の根柢とならなければならぬものである。ところが、科學の學習に於いては、やゝもすると、知識を並べたて、それを唯棒暗記しようとする傾向があつた。實際に見、實際に行なふのではなく、主として紙の上で學び、頭の中に思ひ浮かべることをつつて、十分だと考へられがちであつた。

いふまでもなく、それではいけないのである。科學は、もともと實際の生活に發生したもので、その理論は、實生活に生かされるのが常道である。私どもはその常道に則とつて、實際

に見、實際に行なひ、實際に随つて進めて行くといふ態度に立たなければならぬ。單に知識を並べたてて、それを徒らにふりまはすのではなく、先づ以つて事物現象の真相を見極め、合理創造の精神を養ひ、國運の發展に寄與することが大切である。

科學の取り上げる問題は、うはべだけを見れば、或は動物とか植物とかいふ、せまい分野のものもあるであらう。けれども、それを深く掘り下げて行けば、そこには、殆ど總べての分野とのつながりが現れて来る。このやうにして、一藝に達すれば萬藝に通ず。といふことが、科學に於いても、よくあてはまるのである。

私ども日本人が、これまで科學を愛好する心の薄かつたことや、物事を追及する力の早く衰へる傾きがあつたことなどは、これを年少の頃から心がけて、十分改める必要がある。そのためには、又、家庭の科學化をはかること、科學博物館のやうなものを多く利用することなども、大切になつて來る。しかし、肝心なのは、やはり國民總べてが、自發的に探究欲を持つといふことである。私どもは、みんな力をあはせて、一刻も早く、科學日本をりつぱに建設し、世界に雄飛することのできるやうにしなければならぬ。

兵器の改良はいふまでもなく、天然資源の開発や利用、いろいろな生活物資の増産配給、さては國內の政治經濟の合理化、

人口増加、健康増進といふやうなことで、みんな科學と結びつかないものはない。日本は、長く天佑に恵まれ、島國の中におだやか過ぎるその日その日を送つたことも手傳つて、國防上、或は實生活上、大事な鍵である科學の理會や應用に、まだ十分でないところがないではなかつた。日本人の有する強い愛國の熱情と、すばしこさ、勤勉な活動に加へるに、科學の力を以つてするならば、一切のむづかしい事がらが、片づかないわけはない。

もとより科學の世界には、それごとく専門があり、隨つてその先達である専門家がなければならぬが、このやうな専門家だけで、一國の科學が進むものではない。國民の一人々々が、

科學的態度を持ち、日常生活に科學を應用具現して、常に新しく工夫し發見して行くといふやうなことが、具備してゐなければならぬ。さうして、いろ／＼の方面の知識を、なるべく豊富に、しかもつりあひよく備へてゐることが大切である。國民の科學的な地盤があつてこそ、専門家の研究もいよいよ進み、皇國の科學が、健全な發達を遂げて行くのである。私どもは、この點をよくわきまへて、國民總べてが、よき科學の理解者となり、日々の生活を努めて科學化するやう、心がけなければならぬ。

私どもは、こゝで江戸時代に於ける伊能忠敬や關孝和といふやうな人々の業績、或は又、蘭學の研究に就いて、思ひ浮かべ

てみる必要がある。それらの人々の胸中には、科學學習への熱意がみなぎつてゐた。さうして、生々發展の一途をのみたどる皇國日本に生をうけたものとして、その血潮の中には、比類なく尊い、國を思ふ赤誠が見られたのである。しかも當時の國情は、かうした天才や専門家に對して、殆ど力ぞへをしなかつたのであるが、結局それは、國民全般が、科學といふものに無關心であつたからである。昭和の聖代に生まれた私どもは、明治大正の時代に於ける優れた研究の跡を受けて、今や國民皆科學者といふ力強い前進を始めなければならぬ。

大東亞戰爭となつて、敵國と科學の戦が甚だしくなつて來たから、今後は、かれらより優れた科學力が、日本で興らなければ

ば、戦争には勝つことはできない。かれらと雖も、日本を凌駕りやうがしようど、真劔にやつて来るのは、當然であるから、日本も今までのやうに、外國の模倣を以つてすますわけには行かないのである。優れた創造や發明は、國民こそつてこれを育て、これを取り上げ、これを成し遂げるやうにならなければならぬ。

十三 勇氣

すべき事は必ずやり、すべからざる事は決してしないといふ意志の強さが、即ち勇氣である。

誘惑いさわをしりぞけ、私欲を抑おさへる克己の徳、艱難かんなんをしのぎ、辛苦しんくに打ちかつ忍耐にんたの徳、小成に安んじないで、何事も進んで行な

ふ進取の氣性、これらはいづれも勇氣である。

かたくなであつたり、強情であつたりするのは、見たところ、ちよつと勇氣であるやうに思はれるが、しかしこれは、正しい事にいさぎよく従ふことのできないものであつて、決して勇氣ではないのである。

軍人勅諭に、

軍人は武勇を尚ふへし夫武勇は我國にては古よりいとも貴へる所なれば我國の臣民たらんもの武勇なくては叶ふまし況して軍人は戦に臨み敵に當るの職なれば片時も武勇を忘れてよかるべきかさはあれ武勇には大勇あり小勇ありて同からす血氣にはやり粗暴の振舞など

せんは武勇とは謂ひ難し軍人たらむものは常に能く義理を辨へ能く膽力を練り思慮を殫して事を謀るへし小敵たりとも侮らす大敵たりとも懼れす己か武職を盡さむこそ誠の大勇にはあれされは武勇を尚ふものは常々人に接るには温和を第一とし諸人の愛敬を得むと心掛けよ由なき勇を好みて猛威を振ひたらは果は世人も忌嫌ひて豺狼などの如く思ひなむ心すへきことにこそと仰せられてある。

この勅諭はもとく軍人に賜はつたものであるがわが國は國民皆兵であり、國民全體がこれを奉體すべきものである。明治以來、數度の戦役事變に際して、出征する子弟を送つた父

兄たちが、家のことは決して心配するな。一心に御國のために盡くせ。と言つて、勵まして來たのも、よくこの勅諭を奉體して尚武の精神を發揮したものだといふことができる。

畏くも、明治天皇の詔に、

祖宗以來尚武ノ國體

と、明らかに仰せられてある。實にわが日本は、尚武の國からである。大東亞戦争下、いかに多くの忠勇義烈な皇軍將兵が、義勇公に奉ずる眞勇をあらはして、國體の精華を發揮したかを思ひ合はせるべきである。しかも私どもは、それに續くべき大任を持つてゐる。

勇氣は、ひとり戦時に大切であるばかりでなく、平時にも大

切である。私どもが學業に勵み、善良な習慣を作るにも勇氣がいり、或は又、身體を鍛へるにも勇氣がいる。又、傳染病患者を治療する醫師にも、荒海に乗り出す漁夫にも、勇氣がなければ、その業にたづさはることはできない。

つゞら折の道をたどつて、谷川を渡り岩根をよぢ、始めて高山の頂に達することができ。途中の困難に屈した者は、とても頂上の壯觀を味はふことができない。何事を成すにも、先づしつかりと目的を立て、よくそのてだてを考へた上で、順序を追つて、うまずたゆまず進むことが肝要である。途中で思ひがけない妨げに出あつて、失敗することがあつたにしても、それを又、一つの試煉しれんとして考へ、あくまで自分の力を信じ、

勇氣を出して進まなければならぬ。初めは勢よくかゝるけれども、次第に、疲勞ひろうや嫌忌けんきが生じて來るものであるから、何事をするにも、仕遂げるには、忍耐が必要である。「百里を行くものは、九十里を半ばとす。」といふのは、よき誠まことめである。このやうにして進めば、必ず目的に達することができるのである。勇氣の多い少いは、或る程度まで、身體の強さ弱さにもよるが、しかし主となるものは、精神の鍊磨である。眞の勇氣は、自分のすることが總べて道義にかなひ、省かへりみて公明正大、少しも天地に恥ぢないといふ信念のもとに、始めて生まれる。随つて、眞の勇者たうとするためには、精神の鍊磨こそ大切である。

私どもは、義は勇に因りて行なはれ、勇は義に因りて長ず。といふ言葉を、絶えず心の糧にしなければならぬ。堅忍持久の精神、不撓不屈の氣魄も、このやうなところに始めて生まれるのである。

文永十一年の十月五日、元の大軍が朝鮮海峡の對馬に上陸した。當時の元は、支那はもとより、遠く中央アジアを征服し、ヨーロッパまでも、その馬蹄でふみにじつたほどの、世界最強を誇る軍隊を持つてゐた。

ところが對馬では、守護代の宗助國公が國府にゐて、同日夕刻この報に接すると、すぐ手配をして、部下八十騎を率ゐ、夜半に佐須浦まで急ぎ進軍した。元の軍勢は、その五日前に、いち



早く先遣船隊を以つて對馬の西海岸に上陸し、同日午後には、既に佐須浦へ進出してゐたのである。道路は不完全であり、守備兵も極めて僅かであつたわが軍が、上陸の途中で敵をむかへ討つことは、到底できなかつた。翌六日は、朝から更に一千ばかりの敵が上陸を始めた。そこで助國は、その僅かな手兵で防戦に努め、これを先途と戦つた。けれども衆寡敵しがたく、主將以下全員こと

ごとく、壯烈な戦死を遂げたのであつた。

對馬を襲つた敵は、越えて十四日、更に壹岐の島を侵した。壹岐の守護代平景隆公は、僅か百餘騎の軍勢で、敢然と進撃した。これも、もちろん衆寡敵すべくもなく、遂に城に引き返して、最後の抵抗を行なつたが、十五日には、景隆以下の將兵ことごとく、城を枕にして果てたのである。

この時、島民男女は、決して降服をがへんじなかつたので、敵兵のために、残忍無道な取扱ひを受けたといふことが、記録に見えてゐる。

あたかも大東亞戦争のさなか、アツツ島でアメリカの大軍の來襲を受け、寡兵よく戦つて、遂に玉碎した山崎部隊長以下

皇軍將兵の壯烈な最期は、まさにこの對馬壹岐の防戦を、まざまざと今に見る思ひのするものである。

十數倍の敵をむかへて、なほ屈せず、全軍ことごとくが忠死するといふことは、實にわが國のみに見られる武人の特色であつて、それは、ひたすら皇國のために盡くす至誠の念なくしては、できないことである。この至誠の念は、平生の勇氣によつて養はれ、勇氣は、また至誠によつて發揮される。大東亞戦争下、私どもは怠ることなく、堅忍持久の精神、不撓不屈の氣魄を養ひ、眞の勇者となつて、皇國のために七、生報國を誓はなければならぬ。

十四 古武士の覺悟

「武士道といふは死ぬ事と見つけたり。」とは、武士としての心構へを最もよく表した言葉として、あまねく知られてゐる。この中には、きつぱりとして力強い武士道の真髓しんずゐが、うかゞはれる。

この言葉を「葉隠」の中に書き残した山本常朝は、又次のやうにも説いた。

「武士たる者は、生きるか死ぬかといふ場合には、死ぬ覺悟をすればよい。そこには、別に何の理窟もない。はらをすゑて進むだけのことである。手がらをあらはさないで死ん

で行くのは、犬死だなどと考へるのは、上方風の思ひあがつた武士道である。

武士道では、あれかこれかといふ分別が出た時には、既におくれを取つた時である。忠も孝もない。たゞ、無我夢中になつてをれば、そのうちに、忠孝はおのづからこもるのである。

私どもが、一番心しなければならぬのは、實踐躬行じつせんきゆうかうといふことである。「葉隠」の言葉は、即ちこの點をよく諭さとしたものと、いふことができる。「葉隠」には、更に次の言葉が好んで用ひられてゐる。

「その時が唯今。」

かねてから、よくよく考へておいて、心に覺悟を定めておかないならばならない、といふのである。しかも、私どもは、死生に就いて達觀した氣持を求めることが、一番大切である。こゝに始めて、至誠盡忠の誠に徹することができる。戦場で、

「天皇陛下萬歲」

を絶叫して、護國の華と散つた皇軍將兵の最期に就いて、私どもは、幾多の尊い物語を聞いて來た。前線と銃後とのさかひを設けず、修文練武にいそしんで、皇國民としての眞面目を發揮することが、今の私どもにとつて、根本の心構へとならなければならぬ。それが又、そのまゝに、古々から傳はつた武士道精神の眞髓をつかむことである。

武士道は、ひとり武士だけの守るべき道ではない。現下の國民總べてが守らなければならぬ道である。又、武士道は戦時だけの道ではない。それは同時に、平時の道でなければならぬ。山本元帥の愛誦せられた「常在戦場」といふ言葉も、全くこの意味のものである。なほ、これらの點と結んで、武道初心集には、次のやうなことが説いてある。

「武士たらんものは、大小上下に限らず、第一の心がけたしなみと申すは、その身の果際はてまはにとゞまり申し候。常々何程口をきき、利根才覺に見え候者も、今を限りの時に臨み、前後不覺にとりみだし、最期あしく候ては、前方さきかたの善行は、みなく

水に成り、大きにはづかしきことにて候。即ち、この臨終の覺悟といふことが、戦時だけでなく、又、平時でも大切な事がらである。

吉田松陰先生も、また同じやうな事に就いて、門下の品川彌二郎を誡めて、かう言はれた。

「十七八の死が惜しければ、三十の死も惜しし。八九十、百になりても、これで足りたといふことなし。草虫水虫の如く半年の命のものもあり、これを以つて短しとせず。松柏の如く數百年の命のものあり、これを以つて長しとせず。天地の悠久に比せば、松柏も一時の蠅なり。何年ほど生きれば、氣が濟むことか。浦島武内も、今は死人なり。しかし、

人間僅か五十年、人生七十古來稀なり。何か腹のいえるやうなことをやつて死なねば、成佛はできぬぞ。壽命の長短は、問題ではない。まして、功名富貴などは、かへりみるに足りない。求めなければならぬのは、皇運扶翼の大道に終始するといふことである。松陰先生の類まれな精神氣魄は、即ちこのやうな心構へから生まれたものである。

十五 皇國の使命

皇國日本は、今や肇國の大精神に基づき、大東亞建設のため、米英その他の敵國と戦を續けてゐる。こゝ、數年にわたつて、忠誠勇武なわが皇軍將兵は、陸海空の各方面によく奮闘し、一

億國民が、また堅く銃後を守つて、舉國一致の實を挙げ、その間、著しく戦果を擴大することができた。けれども、また敵米英を屈服させるまでには至らない。かくて長期戦の段階へ突入しただけでなく、これまでにない國家の重大時機に際會したのである。

古來わが日本は、對外的に幾たびか大きな國難に出あつた。その第一は、刀伊の入寇、元の襲來である。中でも、元寇の時には、前後三十數年の長きにわたつて、長期戦がくりひろげられた。元は、東亞の天地を席捲し、その餘勢を驅つて、文永及び弘安の兩度、わが國土を襲つたが、殊に弘安四年には、艦船一千餘隻、將兵十餘萬の大軍を以つて、わが西邊の地を侵した。當時

のわが國としては、まことに重大な危局であつた。けれども、龜山上皇の御身を以つて國難に代らんとし給うた叡慮のほどをかしこみ、北條時宗は、一身をなげうつて起つた。それに應じて、又、全國の將兵が、一せいに奮ひ起ち、上下舉つて愛國の至情に燃え、老幼男女一致して事に當り、遂に元の大軍を覆滅して、よく國難をしりぞけたのであつた。

第二は、江戸時代の末期に於ける歐米諸國の東亞侵略である。その頃、英佛露米などが、わが國に加へた壓迫は、年とともに烈しさを加へ、中でもイギリスは、進歩した近代産業を背景にして、すぐれた武器を作り、それを以つて、東亞諸國を侵略割取しながら、次第にわが國へ迫つて來たのである。

當時、わが國はこのやうな力ある國々の壓迫に對して、對抗
することがむづかしい國情にあつた。時あたかも、王政復古
の大業が成し遂げられ、天皇御親政のもとに、舉國一致の實
が擧がつたので、外敵に侵略のすきを與へず、幸ひにこの難局を
切り抜けることができたのである。

第三は、明治二十七八年戰役、第四は、明治三十七八年戰役で
ある。一はその頃、東洋の大國と誇つてゐた清國を相手とし、
他は、ヨーロッパアジアにまたがる強大國ロシアを敵にまは
したもので、當時のわが國としては、全く危急存亡を賭した國
難であつた。けれども、御稜威のもと、兩戰役ともに、上下一丸
となつて勇戰奮闘し、輝かしい大勝を博して、ためにその後

於けるわが國運の目ざましい發展を招來したのである。

第五は、今、私どもの當面してゐる大戰爭である。現在の危
局は、これまでの國難のいづれと比べても、更に重且つ大であ
る。まことに、皇國日本が、その使命とする大東亞建設の大業
を成し遂げるか否かは、わが國運隆替にかゝる大事件であ
る。一億國民は、聖業達成のために、萬難を排して進まなけれ
ばならない。

現代の戰爭は、昔のやうに、單なる武力の戰でなく、政治經濟
思想科學等、殆どあらゆる面にひろがつて行なはれる、いはゆ
る國家總力戰といふ形を取つてゐる。

武力戰に必要な航空機艦船戰車その他の兵器を作るため

には、すぐれた科學と技術がなければならぬ。同時に又、これらの兵器を十分に準備し、そのおびただしい消耗に備へて、莫大な生産力と資源を必要とする。しかも戦争に勝ち抜くためには、戦線と銃後とを貫ぬいて、旺盛な戦闘意志と強固な必勝の信念とがなければならぬ。さうして、その根本には、どんな事があつても、かき亂されることのない、しつかりした國民思想がなければならぬ。更に、政治は、國內のいろくゝの組織や働きなど、總べてその力を十分發揮し得るやう、運用されなければならぬ。

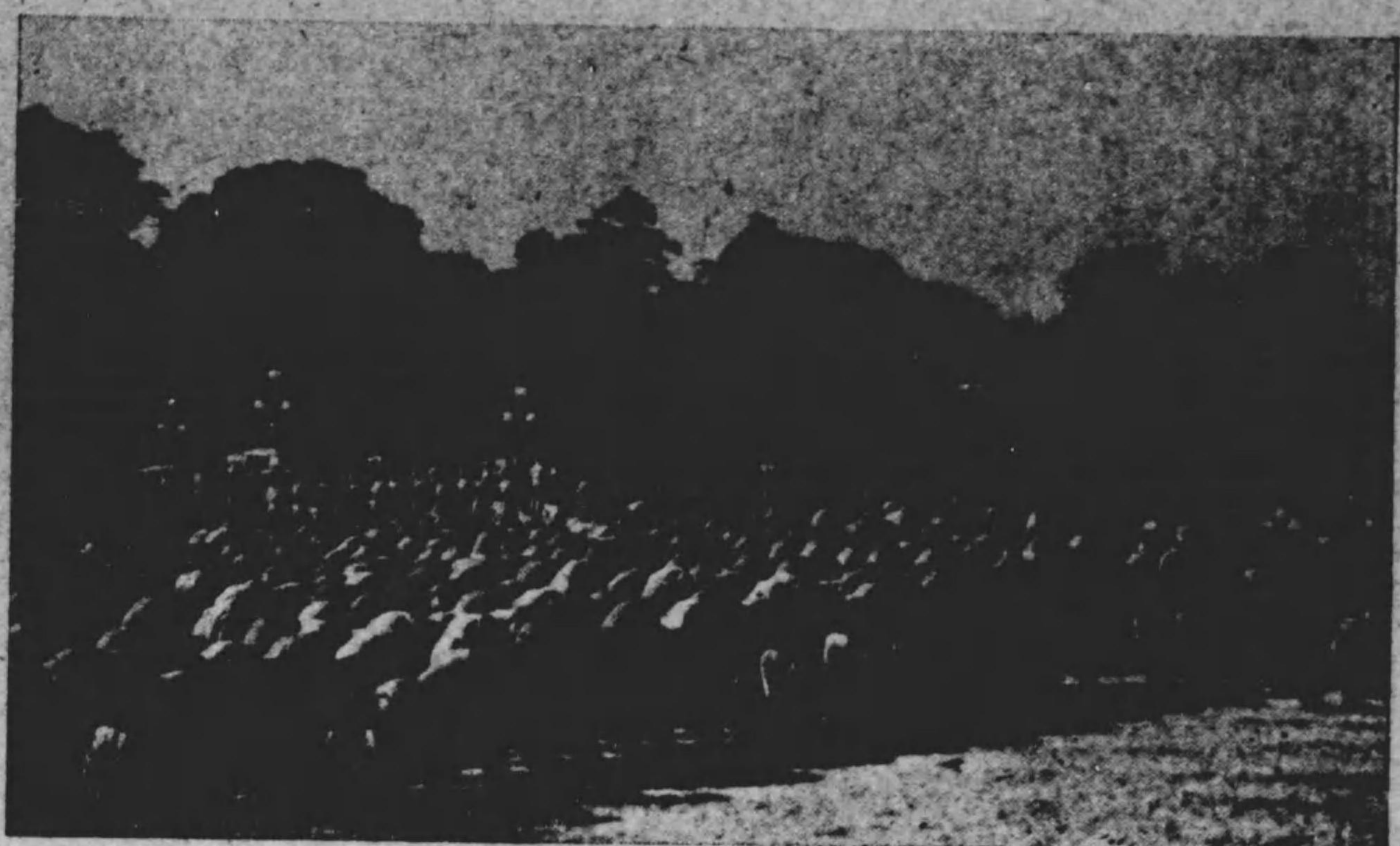
このやうに、現代の戦争は、武力はもとより、科學の力、經濟の力、思想の力、政治の力など、總べてのものを舉げて、行なはれてゐる。随つて、戦線と銃後とは一體であつて、離れることのできない關係にある。特に航空機の發達は、第一線を突破して、その後方千數百里の地點までを戦場と化し、國民全體は、舉げて國土防衛の戦士とならざるを得なくなつた。戦争の勝敗は、全く國家の總力を發揮するか否かに、かゝつてゐるのである。

ドイツは、第一次歐洲大戰の前、武力戦に於いては、よく用意を整へてゐたが、經濟思想などの方面では、よく準備をしてゐなかつた。それ故、武力戦では、最後まで敵國を壓倒してゐたけれども、經濟戦では、孤立の有様に陥つて、軍需品はもとより、日常生活品まで窮乏の極に達した。又、思想戦では、國內一部

の者の誤つた言動によつて、國論の統一を缺くやうになつた。それのみでなく、英米の宣傳や謀略ほろりやくにわざはひされて、國民思想の混亂をひき起し、遂に國民は戦ふ意志を失つて、さしもの勝利を見ながら、結局戦争に負けてしまふといふ苦い經驗をなめたのである。



私どもは、こゝにはつきりと思ひを定め、我執がしよを去り、利益を追ひ求める考へを捨てて、ひたすらに大政を翼賛し奉らなければならぬ。それがそのまゝ、この大戦争に勝ち抜いて、大東亞の建設を成し遂げるゆゑの道である。



この戦争が起つてから、國內では新しいたくさん法律が出来た。又、巨額の資力も必要になつてゐる。私どもは、國家總動員法の示すところや、基本的な國策に就いて、よくこれをわきまへ、それにそむくやうなことがあつてはならない。國の護りを固めるためには、防諜ぼうてつにも心を用ひなければならぬ。又、四百億でも五百億でも、國家の必要とする貯蓄ちちくをしなければならぬ。

しかも私どもにとつて一番大切なのは、國民精神をさかんにするといふことである。國民總べてが、盡忠報國の赤誠に燃えて、御奉公の實を擧げなければならぬ。敵に皮を切らせてその肉を刺し、肉を切らせてその骨を斷つとは、わが國古來の教へである。戦争が、どんなに長期にわたらうとも、私どもは覺悟をしつかりと固め、不撓不屈の精神に生き抜かなければ、大東亞の建設は、到底望むことができない。

私どもは、皇國の恵みに生まれ、皇國の使命に生きるものである。必勝の信念を堅持して、先づ足もとから、國內の生活に寸分のすきも無いやう、心がけなければならぬ。それによつて始めて、私どものふむ一歩々々が、力強いものとなり、新し

い世界は、刻々と開けて行くのである。

昭和十九年三月二十九日 印刷
昭和十九年三月三十一日 發行

(非賣品)

著作權所有

著作
者發
行者

文
部
省

印刷者

東京都小石川區久堅町百八番地

大
橋
光
吉

印刷所

東京都小石川區久堅町百八番地

共同印刷株式會社

272.1
43



